

読売俳壇

矢島 渚男 選

入れるたび袋の蜂蜂起せり

埼玉県 酒井 忠正

【評】子供が幼い頃よく蜂を取った。獲れると袋を開ける。そのつどの騒めきをとらえ実感あり。あれは蜂起だったか。人間は罪深い。灯火親しまた誤操作のパソコンも

東大和市 板坂 寿一

【評】はじめ、ワープロで打ちやがてパソコン。これがどんどん複雑に発達し高齢のため誤操作ばかり。一日の成果が一瞬に消えること屢々。俳句よりも機械に苦勞しました。精米の袋の温み豊の秋

千葉市 宇野嘉世子

【評】農家からいただいた玄米か。精米するとき袋の暖かさ。頂いた農家の人への感謝の思いか。温みの語が生きている。

波郷忌や図書館上の記念館

大阪市 今井 文雄

道草のようなくらしに今日の月

神奈川県 石原美枝子

国生みの仕切り直しや里神楽

八王子市 徳永 松雄

やつと来て惜しむ暇なく去りし秋

三郷市 村山 邦保

老医師の手書きカルテや冬あたたか

横浜市 岡 まゆみ

立冬やひとり小鍋の灰汁取りぬ

吹田市 富永 武司

鯛雲動くともなく広がれり

尼崎市 原 すずえ

小池 光 選

高野ムツオ 選

菊花展出で世の波の銀

川口市 清正 風葉

【評】菊花展で菊を愛でたのち、芒の一叢に出会った。愛好家が丹精込めた菊の黄金色と自然そのまの芒の白銀色。一幅の日本画の中を歩いているようで幻想的。

老い二人使はぬ蒲団数多干す

神戸市 岸下 庄二

【評】兄弟や子供夫婦などの来宅に備え揃えていた蒲団。長い間使うこともなくなった。冬日に広げながら、懐かしい月日を思い出す。どう言はれても毒草に見えにけり

宝塚市 広田 祝世

【評】大丈夫、これは食べられる。美味いそうだよ。そう言われれば言われるほど、その色形は怪しさを増すから人の心理は不思議。心奥の色と思ひぬ吾亦紅

新座市 田中 美登

帰り花伐られるときを待つ幹に

西東京市 永井 康信

何処となく何処か明るい初しぐれ

青梅市 青柳 富也

道端にマスクひとつの湖底かな

福島市 横山ひろこ

緩やかに富岳に至る冬野かな

倉敷市 中路 修平

笹鳴や昼も小暗き農機小屋

東大阪市 浜田 和子

熊除に柿の木剪つて栗剪つて

埼玉県 小町 季生

栗木 京子 選

正木ゆう子 選

猊期来る山の神へと酒と塩

日南市 富田 隆雄

【評】本来なら平明な句として読むかもしれない。しかし熊との共存に悩む現状を踏まえると、立ち止まらざるを得ない句だ。山の神様という存在を、思い出させる句だ。ドンクリも知らざりし子に供えけり

枚方市 坂元 一男

【評】幼子が大好きなドンクリ拾い。それさえも知らずに逝った子の墓にドンクリを供える。近くにドンクリの木があるのかも。在って欲しい。おはあちゃんとお愛称の鷺来る

大津市 竹村 哲男

【評】琵琶湖の湖北、山本山で、一羽のオオワシが毎年越冬するといふ。飛来を待つファンも多いおはあちゃん。今年も無事に到着した由。ひしひしと村の行く末憂慮

新築市 松田 正信

父ほどの名馬になれず秋の風

町田市 枝沢 聖文

万三郎岳の空の青さやあのこづち

静岡県 小沢 勝正

銀髪にすると決めた日落葉踏む

横浜市 三上 光子

蜜柑むく青きはあおき香りして

大阪市 高橋 智代

神々は多髯に御在す神無月

名取市 里村 直

鷹柱乗鞍四峰澄み渡る

川崎市 沼田 広美

俵 万智 選

小澤 實 選

しづるるやラーメン店の待機椅子

村上市 鈴木 正芳

【評】ラーメン店までは従来にも俳句に詠まれていただろうが、待機椅子まで捉えられるとは。混む時は混む店だが、今は椅子に人の姿は無く、時雨に濡れるのはかりなのだ。カウボーイハットの人も落葉掻き

東村山市 副島 健

【評】カウボーイハットをかぶった落葉掻きの姿が新鮮だった。帽子の大きなつばに落葉がしばらく乗ることもあるか、と考えるたのしい。洗濯機がたりと止まり秋深し

川崎市 折戸 洋

【評】電気洗濯機が洗い終えた音を「がたり」と捉えたのがいい。槽内の洗濯物の質感まで捉えている。いつか深秋という季節になっていく。深々と両掌に掬ふ秋の水

名古屋 加藤 剛司

京の路地裏「新走り有りますえ」

大津市 星野 暁

白さ増す裸体のモデル冬隣

東京都 岩崎 美範

くつさめをこらへてのはす鼻の下

津市 渡辺 健治

のし餅の届いて切るは父の役

名古屋 徳広 光恵

星型の人参散らすカレーかな

横浜市 沼宮内 薫

写真屋のペロペロバーや七五三

松江市 三方 元

黒瀬 珂瀾 選

大阪の喫茶店で

くどうれいん (歌人)

短歌あれこれ

仲の良い歌人の染野太朗さんと、大阪の喫茶店でふたりで即詠をしたのがこの夏のいい思い出。さまざまなお題の恋の短歌で構成されたショートフィルムのような共著の短歌集「恋のすべて」のための書きおろしだった。コーヒの香り漂う店内、古時計の振り子が揺れていた。歌人同士で即詠するときの、互いの集中力が波紋のように響き合う瞬間が堪えなかったのしい。一時間ほどで、ふたり合わせて十五首できた。その間、隣の席で編み物をしていた女性が不思議そうにこちらを見ていた。ふたりで来たのにずっと黙っていて、時折交互に喋ってはまた難しい顔をするわたしが、お互いの短歌を讀みあっていたとは思わなかっただろう。筆跡にともしずかなためらいを見つけたきみの秋の手紙に limited. それを最後に黙り込む通訳の飲むアイスコーヒー くどうれいん 染野太朗



題字デザイン・イラスト 福田美蘭

明記。歌(俳)